

天野郁夫著「大学改革の社会学」を読む

- 大学と高校の接続(アーティキュレーション)を考える -

わが国の中等学校と大学とのアーティキュレーション(ここでは「接続」と訳しておこう)を問題にするにあたって、まず一八九一(明治二四)年に行われたある講演の話にふれておきたい。講演者の名前は伊沢修二。創設期の東京師範学校、東京音楽学校などの校長をつとめたアメリカ帰りの教育者であり、また当時の代表的な学制改革論者でもあった。講演の題目は「我国の教育制度特に学校系統について」というものである(「国家教育ノ形体」『伊沢修二選集』信濃教育会、一九五八年、所収)。そのなかで伊沢が提起したのは、まさに学校系統におけるアーティキュレーション(接続)の問題であった。伊沢によれば、発足から二〇年近くをへた日本の近代学校制度の最大の問題は、「尾の方」の小学校から発達してきた学校系統と、「頭の方」、すなわち大学から始まったそれとの不連続にあった。この二つの学校系統は「どこかで接続せねばなら」ない。ところが「今日の小学から大学に至ります迄、諸学校の系統は、遺憾ながら未だ十分に連続しておら」ない。そこに学制改革の最大の課題がある。つまりアーティキュレーションこそが最大の問題だと、伊沢は指摘したのである。

P.239

天野郁夫著「大学改革の社会学」

玉川大学出版部 2006年3月1日刊

- 2006年10月6日記 -